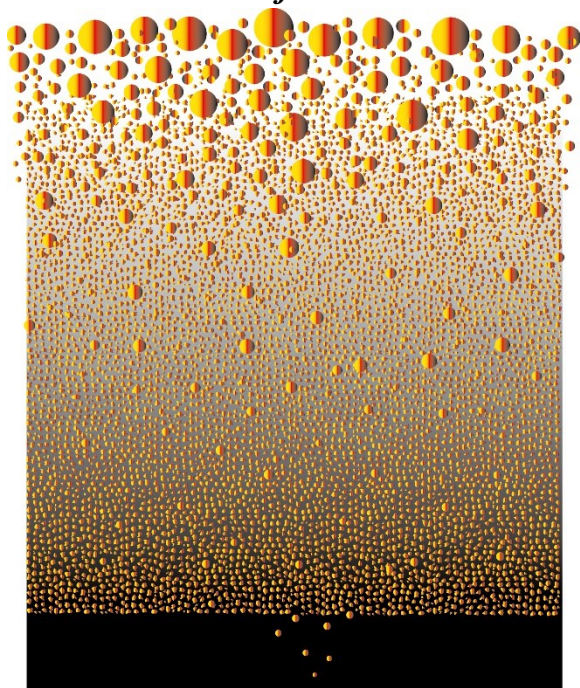


詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第12号
2017年9月

目次

| | | |
|-------|----------------------------|----|
| 田中はじめ | 宜しくって何だ？ | 1 |
| | 女性へ唱和せよ | 4 |
| | 畳の上で | 6 |
| 池田昌子 | 夏の朝 | 8 |
| 伊東友乃 | 風呂とマスクと詩 | 10 |
| 画図佳織 | 神の業 | 14 |
| | 夏の午後 | 16 |
| | 台北 | 18 |
| 関根全宏 | 金色の月が | 20 |
| | ——ディキンソンによせて | |
| 戸張雅登 | ディナーの支度 | 22 |
| | 仰せのままに | 24 |
| | Happy July 4 th | 26 |
| 森島かさね | 怪物 | 28 |
| 渡辺信二 | おやすみ | 30 |
| | なおも春を求めるか | 32 |
| | 山火事 | 34 |
| | 今日この頃は | 36 |
| 表紙原画 | 鈴木順三「パッチング・ケア1」(表紙) | |
| | 「夢の入口」(裏表紙) | |

宜しくつて何だ？

田中はじめ

適当に ほどよく あなたの考えで
宜しくやって下さい

「何だ ただのお任せか」

違います ちようどよい具合に ということ

適切に 一聞いて 十取り計らつて

付度し こちらに責任とらせないよう

そのころ わたしは 彼女と宜しくやっているけれど

「宜しくとは 無意味な添え語だろ

宜しく願います 今後とも宜しく と

人に無内容な好意を示したり 何かを漠然と頼んだりする」

いえ 他の人に好意を伝えてもらおう言葉です

宜しくお伝え下さい ほかの方にも宜しく

お父上にも宜しく「それが好意か ほんとうに？
無内容な挨拶にしか聞こえない」

わかっております ほんとうは

ぜひとも何々すべし が当然なのです

必ず衆（もろもろ）とともに

宜しく論（あげつら）ふべし（『十七条の憲法』）

議論して決めべきだ

宜しく万機公論に決すべし（『五箇条のご誓文』）

皆よろしく議論して決めるべきだ

そうは言っても この日本が実現させません

「日本は美しいから 安倍首相よろしく」

「おい ヤジっっちゃダメだぞ」とヤジってみせる

自己撞着よろしく ヤジった方（かた）に責任ありません

宜しくお見逃しく下さい

「では 英語に訳してみて」

そんな 無理難題を

一言で多くのことを押し量るこそ

「宜しくって 無責任体制

一億総無責任って」 日本文化の極致

女性へ唱和せよ

田中はじめ

ここは日の本 女性が太陽であつた国を
今 不吉に覆う暗雲がある

一体 誰が払拭するのか

答えを求め 3日3晩

川沿いを遡るが

ぼくらの焦燥を 川音がさらに掻き立てる

4日目の夕暮れ 麗しい女性の姿が見えた

激しく水の叩く岩場に すっくと立って

彼方を 強い眼差しで見つめる

やはりここは日の本 女性しかいない

あれは 争いを治めて 15月 金印を受けた巫女か

5月5日に 要塞を占拠した少女か
あるいは 7月に 民衆を導いた女神なのか

いずれでもあり いずれでもない

高く右手を掲げ 現代のくすしき魔歌（まがうた）を

高らかに歌う 紛れもなき

現代ニッポンの女性

その声は ぼくらの魂さえ消してゆく

夢なのか その姿を仰ぎ 聞き入る

彼女とともに ぼくら男たちも 立ち上がれるか

せめて唱和できるなら

禍々（まがまが）しきもの 浪間に沈む

必ず沈み 不吉な予感も水に流れよと 切に願う

暈の上で

田中はじめ

久しぶりの土曜休みだが

つい 7時には目が覚めてしまう

ラジオを付けて

朝ごはんを食べ終わり

畳に寝転がって本を読む

隣の敷地から 鳶（とび）の大声が聞こえ

8時のニュースだ

タワークレーンが唸り始め

レンチやバール ハンマーの音が響く

なんだか ラジオの音が割れ始める

どうして この頃のアナウンサーは

切口上で 尻上がりの読み方をするのか

未来永劫のために 平和な世界を切り開こう

堪へ難キヲ堪へ 忍ヒ難キヲ忍ヒ

ザーとかブーとか ノイズ

堪えがたくまた忍びがたい思いを乗り越えて
雑音が入り

以テ萬世ノ爲ニ 太平ヲ開カムト欲ス

未来永劫のために 平和な世界を切り開こう

いろいろな音声が混ざる 過去の音も入る

ええ 音量が大きくなったり

小さくなったりと 訳が分からないけど

聴きたい内容の音声なら 少しは聴こえる

平和に向かって改良したい

立ち上がり 窓を開けると

パッション・オレンジ色のタワークレーンが

太陽光をこちらに反射させる

ああやって高層マンションが建ってゆく

ああ 建ってゆく

数えれば なんの偶然か

クレーンのフックが 9条の鉄索を吊り上げている

夏の朝

池田昌子

ニイニイゼミが鳴いている

去年はもっと数が多くて煩くなかったか

あるいは昨日の雹に遣られてしまったのだろうか

始発の都電が騒がしく過ぎると

ぱたつと 鳴き声が聞こえない

空恐ろしいほど 静かだ

窓ガラスの向こうは

くつきり鮮やかに

榎木と白樫と桜の樹を映している

トラックもタクシーもクラクションを鳴らし

ビルや人と鬨ぎ合う

陽光が有無を言わせない

珈琲メーカーの警告音が鳴る

玄関ドアが開いて

ユリが小躍りで遊びに来た

坂下の小学校から笛の音がし始めると

プールではしゃぐ子供たちの

鮮やかな高音が響き渡る

十時になってクマゼミが鳴き始めた

「おやつの間かなかな」と

ユリが言った

風呂とマスクと詩

伊東友乃

鼻がずっとつまっているのであつて

マスクを耳からはずさず

今夜も風呂に入るのである

湯気がもうもうとたちあがるなか

ある詩人の詩集を読むのである

この詩人の詩はどれも

花の詩である

野菜について書いても

遊園地について書いても

雨について書いても

もう 宿命的に

花の詩になつてしまうのである

いちまいいちまいの頁から

匂いたつ

といつても わたしの鼻はつまっているのであつて

きつとそこらじゆうに

うすむらさきや 藍色の

花の匂いが充滿しているのだろうと

推測しつゝ

けれど だんだんと頁は

重みを増して

繰るのがおっくうになってきた

ところで

あ 落ちた

色つきの水滴がいまにも

滴る空気のなか

ついでと一切れ

頁のあいまから

葉が 落ちた

印字された

みどりの文字は

湯船のなかで

あつというまに 滲んで

判読不能となり

う とか わ とかが

かろうじて 残って

にやっっている

わたしは濡れた文字たちを

睨めつけて

ざぶり全身を立ちあがらせてみる

とりわけ

何かが咲くわけでもない

ぼやけた鏡にうつっているのは

いちまいのマスクを

耳にかけてままの女

鼻をつまらしたまま

どこもかしこも ぼんと

ふくれあがる桃色の肉体 それひとつ

神の業

画図佳織

どうせ

ねるねるねるねで できた国なんだから
いっそのこと

葦舟をひっくり返すみたいに

息を吹きかけて

海の泡に戻してしまえばいい

死んだ人も

生きている人も

ブルトニウムも

道連れのたくさんのものたちも

ごちやませにして

ねるねるねるねで

今度こそは

スプーンをにぎって

そのまま口の中に

もう誰もうんだり

殺したりしないでください

夏の午後

画図佳織

雨雲が青空をおおい

どしや降りの雨が

窪みという窪みに

たまっていった

いまは自分の歳がわからなくなる季節

いっしょに住んでいる人が

知らない人だった頃

寝転んだ畳も

ただの畳だった頃

未来が明日でしかなかった頃

歳月はまるごとどこかで

雨宿りでもしているのか

それとも

消せないシミの奥に

もぐり込んでいるのか

雨はあっけないほどすぐに上がった

畳のうえで

寝てしまったわたしは

軽い頭痛と吐き気で

目を覚まし

なにもしなかった一日の言い訳を

考えている

台北

画図佳織

古いビルとビルの間
いまも暗い道がある

入口のコンクリートは
知らない水で濡れていて
いつまでも

乾くことはないだろう

流行歌を聴きながら

となりでお茶を飲んでいた人は

お金も払わず

どこかへ連れられていつてしまった

コップに付着した水滴が

ゆっくりと垂れていく

いくつも垂れて

テーブルの上に

小さな水溜りができた

古い水をつたって

道の奥から

なにかを叩く音が聞こえてくる

だれかに耳打ちしたことを思い出し

南も北もわからなくなり

迷い込んだ道の先では

わたしに似た人が

首を吊っている

金色の月が

——ダイキンソンによせて

関根全宏

金色の月が闇夜に浮かぶ

この広大な内陸には

勝利も 華美な装飾も

偽りの過剰さも ありません——

自然のやさしい威厳に

ただ 沈黙のことは与え

死ぬことの証明に

実質のかたちを与える——

肉体も魂も 所有することを恐れ

だが 自由だけは奪われまいと

散るほどに儂い その刹那

それさえあれば――

太鼓の音が遠くに響く

純白の天使がランプを灯す

斜めのことばに 永遠が宿り

わたしは黙って 消えていく――

ディナーの支度

戸張雅登

じいや ディナーの準備はできているかしら？
いいえ、お嬢様 お風呂の準備ができております
まずはお体を綺麗にして頂きたく

乳白色の湯船に浸かる

体にまとわりつくヌメリ感が心地よい

女中が体を洗い流し第二の部屋へ

ギリシャ海の塩を 体に刷り込んで

長い髪の毛には イタリアのオリーブオイルを絡ませる

エジプトの乳香を焚いた第三の部屋に入る

なんだか落ち着くわ このまま寝てしまいたい

女中が彼女の体を薄布で包む

お嬢様の準備ができたようですよ
さあ、ディナーの時間ですよ
女中たちがニヤリとした

仰せのままに

戸張雅登

ほんとは わたし 彼と付き合っているの
五年前から言い寄ってきたひと

そのときは別の彼氏がいたっていうのに

今年からわたしの職場に移って来たの

それで同棲も始めたの

結婚は半年後って言っていた

そんなつもりじゃなかったけれど

彼についてグアテマラに行くわ

彼が料理を作って待っているから

あなたとはもう会えないの

アイドルのライブに行くのも 卒業よ

アイドルだって いつかは結婚するものでしょ？

たまに怒られて痣とかもできるけど 心配しないで

わたしが悪いんだから

だって今夜もこうして

あなたと会っているんですもの

Happy July 4th

戸張雅登

建国記念日が近づいて

僕らは踊るよ 部族の誇りを胸に秘めて

年長者の歌声と太鼓の音に合わせて

円を描いて踊り続ける

タカやワシの羽で着飾って

巨大なテントに集いし僕ら

そこにカメラを抱えて群がる白い人々

テントの外では方々で火花が上がり

星条旗が掲げられる

高まる砲撃音に負けじと

僕らは野太い声をひとつにして

小気味よく地面を踏み鳴らす

夜明けを迎えた曙光の中で

僕はテントの上に留まる

一匹のワシを見た

アメリカよ 永遠なれ

怪物

森島かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

おやすみ

渡辺信二

空虚な夕暮れ

私も 初夏の薄暗い一隅に
すぎなくなりました

労働の疲れの果てに

私も 私の中で

新しい陰となり

紫陽花のほころぶことなく

夕顔の咲くことなく

沼地に 蛙の跋扈

げえーこ げえーこと鳴いて

私もお 薄暗い私に

すぎなくなりました

おやすみなさい

私ももう 泥の中に眠るだけです

なおも春を求めるか

渡辺信二

春が疲れて 去っていった

お城の堀に映る姿は

黄土色（おうどいろ）に汚れ

ぼくらも 疲れて とぼとぼと

歩いていった 春の後ろ姿を求め

みな埃にまみれ 黄ばんでいた

風が時折 ポプラ並木を吹き抜けるけれど

それが ほんとうに 心地よいのか

ポプラも空も 見たことがないほど 黄ばんでいた

見渡す限り 不吉な予感に溢れ

風が 触れてはいけないものを運び

ぼくら もはや 前が見えない

あなたを掴めない

いまはただ この人生に慄く

山火事

渡辺信二

おれたち 島ではないが
予め 島と言われていた
おれたち 豊穡の土地ではなかった
実に孤島となった時から

透明な赤い毒素が

土壌微生物を全滅させて

枯葉が腐食土にならない

製材機を回す者も逃げていた

6年経って 森に火が回ってきた時

指示は伏せる離れるだったが

おれたち 地面に伏せても

窓から離れても ダメだった

木と木の間を這いずり回ったあげく
積もり重なり 汗が絞り出され
ついに燃え カラカラに乾いてゆく

今日この頃は

渡辺信二

今日この頃は やけに霧が多い
通勤の朝 歩道を歩いていても
目的を見失って彷徨っているようで
どの樹も孤独 どの家も寂しい
不意に 歩行者とぶつかりそうになる

去年までは すれ違うたびに
「おはよう」と明るかったのに
今はみな 不思議な笑いようをして
姿を消してゆく 言葉も消えてゆく

先の見えない不安 先の読めない不安
それでも 先人の歩みを知る限り
覚悟はできる と呟く

2017, 03, 16～08, 3 のあいだに贈られた詩誌・詩集・詩書一覧

詩誌

『タルタ』 40。

『金木犀』 21。

『りんごの木』 45、46。

『万河・Banga』 17。

『白亜紀』 148。

『光芒』 79。

『GATE』 24。

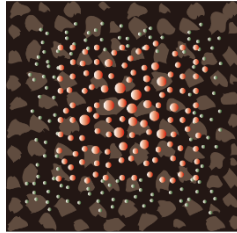
『コア共和国』 21。

詩集その他

紫圭子『豊玉姫』響文社、2017。

蒲池美鶴『樹々はみな』白鷺出版、2017。

黒羽由紀子『待ちにし人は来たりけり』考古堂、2017。



詩誌『立彩』第12号 2017年9月10日 頒価300円

編集発行 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス女学院大学文学部英米文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311